

Ken SAITO

A person who drawing incessant

関根 理恵*

齋藤研

(1939年9月10日 - 2020年1月9日)

齋藤研は、日本の1960年代から今日にかけて、日本の画壇において、日常の風景とデザイン化された色彩コンポジションを組み合わせた具象表現で注目された画家である。齋藤研は、芸術家向けの賃貸住居付きアトリエが多く存在した、池袋モンパルナスと呼ばれる日本で最も知られた東京都豊島区内の芸術エリアで、画家の父と職業婦人（教員）として活躍する母の間に生まれた。彼の父は、職業をもちながら、油絵の画家として独立することを目指し、研鑽に励んだ。

父の友人には、多くの芸術家があり、齋藤研が後日、東京藝術大学で師事することとなる林武氏なども父の知人の一人であったと、齋藤研の母、齋藤さちえ氏は話していた。

齋藤研自身の話によれば、齋藤家が池袋モンパルナスで楽しく生活をしていた時代を知る人物は大変少ないが、齋藤研が所属した会派「独立美術展」で活躍した齋藤求氏などは、画家であった齋藤研の父親と親交を深め、齋藤研が生まれたばかりの頃の様子を知る数少ない人物の一人であったという。

齋藤研の父は、第二次世界大戦勃発によって絵筆をとることが大変困難な状況となり、出兵に伴い愛する家族と離別することになった。その後、戦地で病にたおれ、帰らぬ人となった。

齋藤研にとって、第二次世界大戦は、うっすらと記憶をする父親を思い出させるトピックであり、亡き父の姿を無意識に追い求めるがゆえに強い関心事として、悲しみ、そして、残酷さを象徴する最後まで追求したテーマの一つであった。

齋藤研は、自身が大変読書家であり、冒険ものやノンフィクション、哲学書などを多読していた。齋藤研自身読書家であることを公言していたが、決まって年若い学生たちには、遠藤周作『沈黙』を推薦していたところも、幼少期に受け入れざるを得なかった『不条理』の体験を暗に伝えるものであったのかもしれない。齋藤研にとっては、『不条理』の定義は、カミュの『異邦人』ではなかった。

齋藤研は、後年、ピカソのゲルニカの模写にチャレンジしたのだが、これも、ピカソが残した有名作品だからという理由ではなく、齋藤研にとっては、第二次世界大戦を表現した世界有数の傑作であるからという理由であった。齋藤研にとっては、戦争や平和という抽象的な概念をイメージさせるものというより、第二次世界大戦についてピンポイントで考究できる対象として、意味を見出していたのであろう。

出兵した一家の主と離れ離れになった母子は、母の実家を頼り、福島県相馬郡福田村釣師浜の広大な太平洋を見下ろす小高い山（通称：磯山）に身を寄せた。

祖父宅間六郎氏は、神父であり、磯山教会にて地域の人々に友愛の念を持って奉仕し、布教活動にいそしんでいた。宅間六郎神父は、日本

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会科学科准教授 芸術、文化財保存修復

聖公会（アングリカン・チャーチ）でプロテスタントの教理を学んだ神父である。宅間六郎神父は、立教大学の草創期の代表的な学生の一人でもあり、立教大学の草創期の記録などにも数多くその名を見出すことができる。この祖父こそが、最初の齋藤研の文化的指導者でもあり、また、齋藤研の心の奥底にある宗教美術への憧憬の心情を根付かせた人物である。齋藤研自身は、無宗教無派閥（irreligion）であると公言してやまないが、そうはいっても、数多くの齋藤研の作品に、キリスト教の世界観を描き出した宗教画および卓越した技術によって能力をいかんなく発揮した宗教画家への崇敬の念を感じることは、誰も否定しないだろう。特に、Hubert van Eyck と Jan van Eyck 兄弟作『Gents altaarstuk（神秘の子羊）』、Matthias Grünewald 作『Crucifixión』、Leonardo da Vinci 作『The Virgin and Child with Saint Anne and Saint John the Baptist』については、齋藤研は強い関心を持っており、自身が勤めていた大学の講義や美術館などでの講演会などでも度々、自身の考察を披露することもあった。これらの3つの作品は、表現を含めた技法研究、材料研究を超えて、哲学的要素を含めて、齋藤自身が部分模写を行い、自身の作品の中へ取り入れるなど、長い年月をかけて向き合った作品群である。齋藤研が、後年に板に油彩で描くことを試みたのも、初期フランドル派絵画である Jan van Eyck の影響が強く、より細く、シャープな線による描写表現を試みていたことは、齋藤研を知る仲間の画家たちのよく知るところである。

齋藤研の造形表現とそのイメージの源、そして齋藤研自身のアイデンティティは、幼少期に家族によって形作られたともいえるだろう。